
太陽は一つ限り

E-mo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽は一つ限り

【Nコード】

N9082H

【作者名】

E-mo

【あらすじ】

Disk4での、外側の大陸での話。暴走するイーファの樹は、世界中を混乱に陥れていた。『英雄』を待つことしか出来ない齒がゆき。その中で精一杯生きる人々。いつか種族を超えて手と手を取り合うことが出来るのだろうか。

「大公！！」

下級兵の一人がドックまで大慌てで登ってくる。

リンドブルム大公シドはヒルダガルデ3号の整備をしていた。

霧がなくても飛べるヒルダガルデは実は霧に余り強いように出来ていない。

大抵の飛空艇ならば霧を原動力、エネルギーに変えることが出来るのでそんなものは不要なのだ。

そんな中現在進行形で、世界中を霧が覆っているという由々しき事態が起きている。

元来霧はというものはこの「霧の大陸」と呼ばれる大陸のみに存在していたものはずなのだ。

もちろん、この大陸の名前はそれが所以である。

シドは急ピッチでヒルダガルデの整備と改造を施していた。

呼ばれた大公は機材の隙間から汚れた顔を出した。

いつも上品なマントを翻し、高級な素材の衣服を纏っている、一国の王が

なんとも他の整備士に混じって作業服に着替えているその姿はきつと他国では到底見られぬ光景であろう。

だが、だからこそシドは国民からの評判はとてもよかった。

もつとも、本人は自身の地位にそこまで興味がない上、むしろ女性と飛空艇ばかりを追っかけまわすものだから、王妃であるヒルダはたいそう手を焼かされているようだが。

実は、普段ならば整備士やクルーに任せるのが、今現在は本当に時間がなかった。

急がなければ。国の代表として。一人の人間として。おじとして。知り合いとして。

ただやらねばならない使命があった。そのために一刻も早くシド

は自ら工具を握った。

「…どうしたんじゃ？」

「応援を要請します！…ク族の沼から多数の死傷者が…！」

「なんじゃと！？何故あのような場所から…いや、まさか」

そうだ。あの沼にはいろいろ隠された遺跡だのがわんさか出てきたことがあった。

その一つ。外側の大陸とこの霧の大陸を結ぶ唯一のパイプが、あそこにはあるはずだ。

そしてその場所を縄張りとしてトレジャーハントを行う人間が極秘裏に、そしてかなりの人数でいたはずなのだ。

原石や太古の遺跡や宝が眠っている、などとの噂で充満した土地である。

「原因はイーファの樹の根だそうです！…至急応援を…！」

「とりあえず商業区警備兵達を皆向かわせてくれ。…く、この忙しいときに…」

今。

誰にも言わずに、世界を救おうと、世界を巻き込んだ復讐劇に終止符を打とうと旅立とうとしている人たちがいる。

せめてもの彼らの旅立ちを見送り、援護したかった。

一国の王とはいえ他に何も出来ないからこそ。

ただそれだけなのに。

ぐ、と臍を噛む思いで決断を宣言した。

――そつと、ゆつくり、確実に。

――薄暗いから気をつけて

――あともう少し。もう少しだから。

…あれ？

伸ばした手がかんだのは完全なる空だった。

不思議に思つて顔を上げてみると、そこには緑色の大きな顔のドワーフが仁王立ちで立っている。

その手には今の今まで狙っていた果物がたんまり載せられていた。

「あ、ああ…」

「まあたお前らか！今度こそとつ捕まえてやるだド！！」

「に、逃げるクポ！！」

「逃がさんド！！」

慌ててモーグリは太くて大きなイーファの根を飛び越え、大陸の東側へと向かった。

彼らの住処は反対方向なのであるが、こうなってしまった以上やむをえない。

突如発生した霧のせいで視界が悪く、戻れるかどうかも危うい。

本来ならそんな危険なことはしたくない。

それに、霧は魔獣を発達させる効力があるのか、それとも霧と共に現れたのか、

今まで見もしなかったような強大な力を持つ魔物たちがそこかしこで暴れている。

天変地異が起き、草木は枯れ、イーファの樹の根は世界中を這いずり回り、たくさんの町や村などを破壊していった。

ドワーフ達の住むコンデヤ・パタもその一つであるし、モーグリ達の住むマダイン・サリも莫大な影響を受けた。

コンデヤ・パタはほぼ完全に破壊され、元来崖に掛かる橋のように造られていた集落は見事イーファの根によって落とされた。

それでもまたコンデヤ・パタを戻そうとこうして必死に働く人々の姿は残っている。

ドワーフという種族は背こそ低いものの、農業で鍛えた力は強く、強靱な肉体と精神を持つ特異な種族だ。

現在子供までもが借り出されて復興に勤しんでいるが、老人や女性、働けない幼い子供達は、黒魔道士達の棲む森の奥の集落に預けられている。

本当ならこうして外に出て復興作業するのも危険なのだ。

例のとおり何度も魔物の被害に合い、なかなか思うように作業は進まずにいる。

今、この大陸（海の方こうでは「外側」と呼んでいるらしいが）は…否、世界は全てそうなのだろう。治安も、何もかも最低だ。

2匹のモーグリたちは足りない腹を抱えて考える。

彼らはマダイン・サリをいち早く抜け出してきた。マダイン・サリはどこよりも全ての元凶イーファの樹に近い場所にある。

根の襲撃を一身に受けて、もともと廃墟だったマダイン・サリは酷い有様である。

エーコやラニと共に頑張って作った畑はボロボロだし、歴史的に価値の高いであろう遺跡や文献は全て土に埋もれてしまった。

何より必死に拵えた足場は完全に破壊され、食堂は泥水の流れる川に流されてしまった。

全てが無に還してしまった。エーコが帰ってきてても、これじゃ復興

はままならないかもしれない。

何より食料が手に入らないことが苦痛でたまらなかった。エーコがかつて行っていたように、自分達もドワーフ達からこっそり果物などを拝借することに決めたが、

ドワーフ達の住むコンデヤ・パタもマダイン・サリとて大差はなかった。皆飢餓と無くなった住処や故郷に嘆き、苦しんでいる。

もう少しあるだろうと思っていた食べものも全然なかった。

しかたがない、森の奥にでも潜んでいよう。きっと洞窟の一つや二つあるはずだ。

それに、この辺りには黒魔道士が静かに隠れ住む村があると聞いた。いざとなったらそこへ逃げ込んで食べ物を分けてもらおう。

そんな魂胆を抱き、小さな背の羽根を羽ばたかせ、崖から森へと飛び込んだ。

森の中は、外よりも更に凶暴な魔物がいると共に、食料も他に比べればまじだった。

枯れた樹も、栄養豊富な樹木も多い茂り、食べられそうなものもいくつも見つかる。

少なくとも木の実は両手いっぱい（とはいえモーグリサイズではある）には出来るし、植物もたくさん生えている。

しかし、ここもイーファの根の襲撃がないはずがなかった。

あちこちで木がなぎ倒され、禍々しく巨大な根がいくつも姿を現し、霧を放出していた。

「そっちの茸はどう？」

「むうう…なんか妙な色と模様してるクポ…赤いボンボンについてるし……」

「…た、食べてみるクポ…」

「モーネル！？正気クポ！？」

「この際背に腹は代えられないクポオ……」

「や、やめるクポッ！死に急ぐ必要はないクポッ！！…クポ？」

大きな地響きがあたりを支配する。

後ろに突如現れた気配は明らかに殺意があつた。

慌てて振り向くと、そこには体中全てに目玉を張り巡らせた、おぞましい魔物ヘクトアイズがいた。

こんなの、つい最近まで出会ったことはなかった。完全な未知なる生物。

この星のどの生態系にも属してはいないだろう、見たものに強烈なインパクトを与えるカラーリングの不気味な身体。

そいつはただ無言で魔法の詠唱に入った。こちらを攻撃してくるつもりらしい。

「な、なんだこいつクポ!?」

「とにかく逃げるクポツ!!チモモ!!」

モーグリ達は戦う術を持たない平和的な精霊だ。どちらかということ人間に近く、言語を使ってコミュニケーションをとり、

感情や本能を理性で抑えることが出来る、高い知能を持つ。

けれど強い牙も何も持たない。有るのはこの逃げるための翼だ。

それを大いに活用する時は、今だ!

「逃げるつたつてどこヘクポ!？」

「集落つ!この辺どこかに村があるはずクポ!!黒魔道士達に助けてもらおうクポツ」

「でもこんな森の奥に住んでるクポ?ならきつと魔物除けでもしてあつて簡単には見つからないと思うクポ」

今通つた瞬間の樹に毒の魔法がぶつかり、腐敗していく音が流れていく。

すぐに次の詠唱に入っているのが手に取るように判る。

それでも、だからこそ逃げる。とにかく逃げる。

こんなところで死ぬわけには行かない。

今もエーコは世界のために、あんな小さな体一杯で戦っているんだから!

ボクらがいなくなつたら誰が迎えてあげるんだ!

樹を除け魔物を除け、とにかく、とにかくどこか。

きつとそこには食べ物もあるといい。盗んだってそんな数にもならないし、食料もまともなのが手に入らない。

皆突然変異してしまいたまらない。こらえてきた空腹が声を上げて暴れ始めた。

それを知ってか知らずか、次は目の前を虫のような魔物が前足をぐるぐると回し、口をきらきら光らせ獲物を探しに飛び出してきた。ぎらぎらと牙を輝かせ、どうやらこちらも捕食するつもりでいるらしい。

「ク、クポオ!？」

あまりに唐突だったため、二人は勢いを抑えきれず、魔物の目の前ぎりぎり、ぶつかりそうなところで止まった。

「ど、どうするクポ!？」

完全に挟まれた。

左右は巨木が立ちほだかり、即座には逃げ辛い。

既に後ろのヘクトアイズは魔法の詠唱を終わらせ、次の魔法を撃ってくる一歩手前だ。

目の前の霧の魔獣も勢いよくこちらに向かってくる。

「ク、クポオ~~~~ツ!!!!」

その時。

急激に辺りの温度が下がった。もともと霧でひんやりしていた空気が凍りついた。

思ったかと思うと青白い光が両方の魔物が追ってきている辺りを包み込み、魔物を氷が覆いつくした。

「ク、クポっ!？」

「今一時だけ動きを止めているだけだから、早くこっちへ!」

左の巨木の向こうから声がする。天の助けだといわんばかりに二匹は声の方へと飛んでいく。

そこにいたのはとんがり帽子の、今出会いたいと願ってやまなかった黒魔道士のその人だった。

二匹は彼の姿を捉えると、慌てて飛び立つ。

だがしかし、根本的に黒魔道士は動きが遅い。だから手招きしながらも、モーグリ二匹の方が前方へと進んでしまう。

「そのまままっすぐ！」

「い、急ぐクポ！」

「木にふくろうがにいるはずだから、その辺で待ってて!!」

「お、おいていけないクポ!!」

確かに自分達とは違い、彼らの元は戦闘用に造られた魔道兵なのだ。強い魔法だって存分に使え、魔物なんかには負けはしないのかもしれない。

けれどなんとなく間の抜けた声や、独特のマイペースな喋り方がどうにも頼りきれない印象があるし、何より命の恩人だ。

こんな森の中に放っては置けない。

「ありがとう」

なんだかあべこべだった。助けられたのはチモモとモーネル二人なのに。

疑問に思いながらも木を避けながら言われたとおりまっすぐに飛んでいくと、そこは酷く枯れ果てた森にたどり着いた。

何もなさそうだ。しかし、その入り口付近に看板が立てかけられ、彼の言うとおり木の上に梟が止まっていた。

「ここまで来たら大丈夫。ちよつとまってねー」

黒魔道士は両手を掲げて、何かを唱えている。

突然空気が震え始めた。不思議な音が響き渡る。

精霊の一種であるモーグリ達には、他の誰より敏感にその事象を捉えることが出来た。

ぴりぴりと震える空気、凜と澄んだ透明な音色が体の奥底に直接響いてくる。

これは。

「や、やっぱりボクの言った事は本当だったクポ！魔物除け、して

あつたクポ！」

「…どっちかっていうと、結界の方が正しいような…」

彼が両手を突き出すと、枯れ木の広がっていた空間に亀裂が入り、歪む。

まるでカーテンでも捲っているかのように、そこにあるはずのない潤った木々が顔を出した。

それと同時に、人が生活を送る音が聞こえ始める。

わいわいと楽しく談笑する声、くるくる回る水車の音、静かな水の流れる音、扉が開いたり閉じたりする音、

木の板を踏み鳴らす足音に、チヨコボの鳴く声、家事をしたり、物を作ったりする音……。

豊かで明るい、温かな感じがする。イーファの樹がおかしくなってきた、初めてかもしれない温もり。

「ク、クポ…」

「さ、早く入って。すぐに戻っちゃうから」

精霊という柄にもなくドキドキしながらその隙間に入り込み、羽を休めて地面に降り立つと後ろを振り返った。

しゅん、と不思議な音を立てて幕が閉まり、やはり枯れ木が広がるばかりだった。

「チモモ…」

モーネルがつんつん、と突つつく。

振り返って前を見ると、そこは。

不思議な集落だった。木造の家はにつこり笑ったような顔をあしらった窓が開いているし、黒魔道士の帽子みたいな草鞋の屋根だ。

村の中央は静かに水面が光りを湛えている。

村の出入り口付近には黒魔道士と、コンデヤ・パタから逃げてきたのだらうドワーフが明るく喋っていた。

今の今まで悪事を働いていたモーグリ達は緊張ですこしぴんと背筋を張った。

「危ないところだったね。ぼくは１２３号っていうんだ」

助けてくれた黒魔道士が振り返り、律儀に自己紹介をしながらしがみこむと手を伸ばした。

モーグリ2匹は顔を見合わせながら、小さな両手を差し出した。

「ひやくにじゅう…？」

「うん、123号。よろしくね」

「オイラモーネル。助けてくれてありがとクポ」

「ボクはチモモだクポ！何で助けてくれたクポ？」

「ん？だってそのまま放つといたら死んじゃうよ？」

それにぼくもね、カエル取りにク族の沼に行ってきたところだったから、ナイスタイミングだよ」

「ク族の、沼…」

「もしかして、それ食材クポ？」

「まあね」

まさかと思った。黒魔道士達がカエルを糧とするなんて。

元々カエルなんて好き好んで食べるのは、世界にたった一つ、ク族の人々しかいない。それに食用ではないはず。

それはつまり、この賑やかな村にも、食糧問題の魔の手は着々と伸びているということだ。

モーグリ2匹は小さくため息をついた。

やはりここへ来てもありつけないみたいだ。それでも魔物に襲われる心配をしなくてもいいだけ幸せだと思う。

123号が踏んでいく足場の木の板は小刻みに軽快な音を立てる。

それに習ってモーグリ達もちよこちよこと歩く。

「やつぱり、ここもあんまり食べるものないクポ？」

「他よりはましかなあ、この結界の中は霧の影響少ないから。」

そつえば、確かに霧に包まれているというのに太陽の光をたっぷりと浴びて、きらきらと水面も、屋根も透き通って輝いている。

きっと霧に包まれる以前と何も変わっていないんだろう。

「でももともとそんなに場所広なくて、量少ないし、今他の村の人もたくさんいるから。」

そう話しながら村の奥へと入っていく。

村の入り口付近には、見慣れない金髪の人間らしき生物いた。けれど彼らには尻尾がある。

その金髪の人間と、ドワーフの女性がなにやら異文化コミュニケーションを行っているらしい。

あるときは人間が首を傾げ、ドワーフが憤る。かと思えばドワーフは爆笑し、人間の方が静かに怒っているようにも見える。

「あれは…」

「ああ、ジェノムの人たちと、コンデヤ・パタの人だよ」

「じえの…む？」

123号はこくと首を縦に振る。

「そう、よくわかんないけれど、住んでた場所クジャに全部壊されちゃったんだって。だから慌てて逃げてきたんだけど棲む場所がなくって

それでここに着たみたい」

カエル取ってきたよ、と仲間達に挨拶しながら、そしてモーグリ二匹を皆に紹介しながら村の奥へと進んでいく。

ドワーフの女性が「あんらまためんこいのが来たドねえ、よろしく。おめえさんたち、マダイン・サリのだド？大変だったド。」と朗らかな挨拶をしてくれた。

マダイン・サリのモーグリといえば、コンデヤ・パタにとって歓迎出来るはずない生き物のはずだ。

「…怒らないクポ？」

女性はからからと豪快に笑う。

「既に怒られただド？ならおらが怒ることはないド」

「…ごめんクポ」

気にするな、と最後まで明朗でさっぱりした気質のドワーフの女性に、モーグリ達は急に罪悪感が立ち上ってくるのを感じていた。

そのとき、123号が静かに口を開いた。

「カエルね、少しだけ分けてもらったの。」

「分けて貰った、クポ？」

ク族の沼は、今誰も住んでいないはずだ。

太古にはク族がいた形跡があるが、今ではク族は絶滅危惧種に等しく数が激減していると聞く。

このク族の沼は、もう完全な抜け殻であるのは、何度か覗いた事のあるモチヤとモーネルも知っている。

「…今ね、人間がいるんだ。最初はびっくりして、怖くて逃げてきちゃったけど…」

どうしても、みんなのためだからと思って。そう123号は続けた。「まさかとは思ったけど、フォッシル・ルーも根っこにやられちゃったらしくてね。」

あそこで穴掘りして稼いでいた人が霧の大陸に帰れなくなっちゃって。怪我した人もいるみたいだね。

他に場所がないから、ク族の沼で休んでるんだって。あそこならまだ霧の影響少ないからね」

フォッシル・ルーは古来の人間がこさえた唯一の大陸間を徒歩で移動できる洞窟だ。

また随分と古い頃から存在してきただけあり、遺跡として重要な文化財が発掘されたり、それこそ珍しい宝石の原石などがごろごろしているらしい。

それで海の向こうの霧の大陸の人々の一部はその地で宝探しを生業として生きていたのだろう。

だがしかし、地中にあるフォッシル・ルーはイーファの根の格好の餌食となった。

中心部は根で完全に遮られ、通路としての機能を完全に失われた。フォッシル・ルーで生活していた人々は全て霧の大陸から出稼ぎに来ていた人達なのだ。

こちら側、外側の大陸側に取り残された人は行き場を失い難民となってしまう。

そこで見つけたのがク族の沼だったのだろう。コンデヤ・パタはあ

んな状況であるし、黒魔道士の村は簡単には見つからない。

かといって町の外は非常に凶暴な魔物だらけなのだ。決死の思いでやっとたどり着いたに違いない。

そこに、唯一破壊を免れた黒魔道士の村からの使者が現れる。その絶対的なチャンスを彼らが逃すはずがない。

きっとカエルは受け入れの交渉材料として渡されたのだろう。

「…そういえばあそこでモチャはすごく苦労してるって言ってたクポ……」

「それでも、魔物、出るはずクポ……」

「うん、だから何とか助けられないか皆に聞いてみるつもりでいるんだ。…皆、言うこと聞いてくれるといいんだけど」

「どうしてクポ？」

「ぼくもそうなんだけどね、皆人間が怖いんだ…」

「なん……」

「バカ、あんまりむやみに突っ込むものじゃないクポ！」

モーネルが慌ててチモモをこっそり牽制した。

ちょうど墓場の手前に来たようで、十字架に着せたひらひらと風に舞う黒いマントと帽子が見える。

なんだか幻想的だった。123号は墓場にいた黒魔道士に用があるらしく、そのまま話始めている。

二匹はゆっくり戻ると、同族のモモがチヨコボ舎の前に座っているのを見つけた。

「あれ、モモ。こんなところにいたクポか」

「モーネル、知り合いクポ？」

「ん、大分前にね」

モモの隣に二匹揃って腰を下ろした。

「モーネル、久しぶりクポ。あたしはモモっていつの。よろしく」

「モチャだクポ」

「よろしくクポ！」

「大変クポ？」

モチャがかなり抽象的にたずねたことに、モモは苦笑した。

「そーね、大変クポね。長いことここで暮らさせて貰ってるけどこんなことは初めてクポ」

「こんなことって…」

「こんな風にこの村に他の種族の人間が来るなんて、絶対なかったクポ」

「そうだ。結界を張って入れないようにするほど排他的で臆病な種族だったはずだ。」

これは大きな進歩なのかもしれない。

「全然ボクのとこモグネットこないから知らなかったクポ」

「チモモは登録してないからクポ！本部に行くんだクポ！」

「そ、そうだったのかクポ！！」

「ああ、モグネットね、モグネットもやつと円滑に回るようになったと思ったらこれだクポ…。やんなっちゃうクポね」

モモはため息をつきながら、世界中にいる仲間とやり取りをしたのだろう、いくつかの手紙を取り出した。

「他の大陸のどこも魔物に環境変化に大変みたいクポ」

「やっぱりそうクポか…。オイラお腹すいたクポ…」

「その魚なんか焼いて食えるクポ？あと周辺の森にならちまちま野菜が生えてるクポ」

「あれモモ君、おともだち？」

チヨコボ舎の扉が開いて、一人の黒魔道士が顔を出した。

「えっと、123号に助けてもらったモーネルとモチャだクポ」

「そうなんだ。ぼくは…」

「皆宿に集まってー！ちよっとお話し合いするよー！」

さっきの123号だ。

村を走り回って叫んでいる。きっと入れるか入れないかの話し合いをするのだろう。

「あ、そうだ君達も来て。一番外のことわかってるの君達だからって288号君が。もちろんモモ君もお願い」

「了解クポ！」

明るく返事をする、モーグリ三匹はちょこちょこと123号の後に続いた。

とことこと小さな音を小刻みに立てて木の板の足場を進んでいく。真下は池になっているから、時折近くで魚が跳ねる音がする。

123号がつれてきたのは小さな部屋にいくつも二段ベットがある建物だった。

どうやらこれは宿屋らしい。仕切りに黒魔道士が蓄音機を見つめ、「おんがく」を流して感傷に浸っている。

「やあ、君達がマダイン・サリのモーグリだね？」

3匹は一番手前のベッドに登り、座った。

しばらく静かに休んでいると、

扉が開いて、他の黒魔道士よりもいくばくか落ち着いた雰囲気をもとった、金色の杖を持つ黒魔道士が声をかけてきた。

宿屋の番をしている黒魔道士が嬉しそうに挨拶をする。

「あ、288号君、いらっしやい」

「少し場所借りるね」

「ううん、全然大丈夫」

そう交わしながら、3匹の腰掛けるベットに近づき、隣に腰を下ろした。

「288号」

「モモ、こんにちわ」

「こんにちわクポ」

「はじめましてクポ。ボクはチモモ」

「モーネルだクポ」

「遠いところよく来たね」

「長い長い旅だったクポ…」

「お腹ぺこぺこだクポ」

モーネルはごろんとベットに転がりながらつぶやいた。

「…そうか。外は大変な状況みたいだね」

モーグリ達は丁寧に外を思い出しながら言葉にしていく。

「…真つ白な霧に覆われて、恐ろしい魔物ばかりでおちおち出かけも出来ないクポ。」

それにあちこちの集落は根っこに壊されて人が住めない状況クポ…。聞いたクポ？ク族の沼は家に帰れない人で溢れてて、コンデヤ・パタもマダイン・サリも根っこでぐちゃぐちゃクポ」

288号は無言で話を聞いていた。

彼はこの村の黒魔道士達の中で一番頭がよく、精神的にも落ち着いているので、黒魔道士達に頼られている。

実質この村の全権は彼に握られていると言って等しい。

大抵、自我の目覚めたばかりの黒魔道士達は幼い子供と殆ど代わりがない。

だから、一番理解力があり、知識も豊富な彼が少し理論立てて話せば、殆どの確立でそれは許可が下りる。

だからこそ。

彼は真剣に悩むのだ。彼の判断が全てを決めるのだから。

「ひ、ひいいい」

そのとき、突然宿の扉が開いて、一人の黒魔道士が飛び込んできた。

「た、た、たた」

「どうしたんだい、83号」

「あ、あ、ああの、あの…」

深呼吸をさせ、彼が落ち着くのをしばらく待った。

83号は搾るようにして声を出した。

「に、に、に、にん、にんげん、人間、が…」

「人間が？」

「その、枯れた森で、ずっと…いて…叫んで…怖くて、ボク戻ってきたんだ…」

「人間…まさかク族の沼の？」

288号は宿を飛び出し、村の外へと駆けていく。モーグリ3匹も急いでその後を追った。

結界に近づくと、ぼんやりとその姿が浮かび上がってきた。
何度も何度も同じ回り続け、くたびれ果てている人。

何かを喚きながら樹を蹴り飛ばす人。

たった数人だったが、確かに恐怖を煽るには十分だった。

黒魔道士達にとって、人間は一種の畏怖の的となっている。

自らを戦争のために造り、虐げた人間。そして人間にとつても、黒魔道士兵に襲われた戦争経験からの恐怖の対象となっているのだ。

そんな悪いサイクルの中に閉じ込められている。

「話せる状況じゃなさそう、クボ」

「少し様子を伺ってみよう」

そう言うのと288号は右手を前に突き出した。

空間がゆるりと波打って、もう少し人間たちがはっきり見えるようになった。結界が薄まったのだろう。

『畜生、なんだってんだ、入れる！！俺達を入れてくれ！！』

『助けてくれ！！帰れなくて困ってんだ！！』

「助けを求めてるクボ」

288号はゆっくりうなずくと、もう一度手を突き出す。すると空間が大きく揺らぎ、カーテンの様に人が一人入るような隙間が開いた。

それをくぐり、ゆっくり出て行く。モーグリ三匹と共に。

急に現れた黒魔道士の影に、人々はざわめきたった。

「に、にに288号君、危ないよっ」

「大丈夫。何かあったらすぐ戻ってくるから」

そう言うのと、すぐに結果を戻した。

男達は群がるようにして288号にすがりつく。

「ああ、やっと気づいてもらえた。ここは黒魔道士の村だな？」

「頼む、俺達を匿ってくれ！！」

「帰れねえんだ！おまけにこの土地のことなんて全然わかんねえしよ」

「魔物だらけでおちおち寝てられもしねえ！」

「…判った。大体の状況は仲間から聞いているよ」

288号は振り返った。

「…そうだね、困っている人達を見捨てるわけにはいかない」

ゆつくりと、万感を込めて、声を出した。

「少し話しをしてみる。待っていてくれ」

そうして村に帰った288号は、早速村の人々に提案した。

黒魔道士達からは反対の声が多数上がった。皆怯え、震えている。

「僕から頼む。フォッシル・ルーの人も、未だあそこで寝泊りしているコンデヤ・パタの人たちもモーグリ達も皆、ここで助けてあげたいんだ」

「ボ、ボクらも!?!」

「いいクポか!?!」

「多分ここが大陸中で一番安全だから」

例え造られたモノだとしても、黒魔道士達は本当に優しい種族だから。

それに既にドワーフの半分や、ジェノムたちだって生活しているのだから、きっと人間とも共生出来るだろう。

チモモとモーネルは飛び上がって喜んだ。

未だモリスンなどのモーグリ達の一部は、ボロボロのマダイン・サリでひもじい生活が続けている。

一番力のあるラニが復興を手伝ってはいるが、あの大きな根っこを撤去するのは無理だろう。

それも皆、あの場所で、エーコを待つため。

でも、それで死んじゃったら?二匹はとても心配だった。

マダイン・サリはイーファの樹に他のどこよりも近い場所であるため、一番根による被害が大きい。

今現在、いつ根っこが暴れだすかも判らない危険な場所なのだ。なんとしても自分達の分以上の食料を手に入れ、村へ帰るつもりだった。

でもこれで大丈夫、きっと皆助かる。誰もつらい思いをせずに。

「で、でもにんげん、だよ？こわくない？」

「大丈夫。悪いようにはしないと誓ってもらう。ここは僕たちの土地だ」

「オイラたちもいるクポ。いざとなったら守ってあげるクポ！」

「クロマ達を苛める悪いやつはおらたちがとつちめてやるド！」

「……本当？」

まだ勇気が足りない。288号はもう一声頑張った。

「ならこうしよう。今来ている人間だけを入れるんだ。そうして彼らがいい人だとわかったら、他の人間も入れる。これでどうかな？」
こうして仮の期間が設けられた。けれど人間達のことと考えて、その期間はわずかな一日ということとなった。

288号君がそういうなら、と呟く彼らに、288号は苦笑しながらも自分の責任の重大さをつくづく思い知るのだった。

人間を助ける。それが彼らにとってどれほどの勇気だったのか測りかねる。

彼らは、心を持つ、新しい命、種族なのだから。

いつか、288号は黒魔道士達を新しい種族としての存在が認められ、種の保存を続けていけないかと思っている。

戦争のためではなく、種族として生きる続ける存在になれば。ジェノムたちの知識と力を借りればきつと無理ではないだろう。そんな願いを込めて、288号は村を見渡すのだった。

翌日、黒魔道士達はしぶしぶながらうなずき、やっと準備が始まった。

しかし、それからが本当に大変だった。

小さな村を拡張し、臨時の家をいくつか作る。

そのための木材を魔物の棲む森から調達せねばならないし、食料だつてたくさん蓄えておかねければ。

建築は力自慢のドワーフの若い少年達が中心となつて行うことになり、食料調達、畑仕事はドワーフの女性を中心に、ジェノム達が行

った。

そして魔物を除けられる程の魔力を持った黒魔道士達と交渉の窓口モモは、率先してク族の沼やコンデヤ・パタの難民救出へと動き出した。

その結果。結界は一時的に取り払われ、普通に人間もドワーフも、自由に入りが出来るようになった。

人間からもひよっとしたら非難が来るのではないかと恐れられていたが、彼らは皆霧の大陸中のトレジャーハンターばかりだったらしく、

黒魔道士の直接被害を受けたりンドブルムの人は少数で、殆ど反感なくすんなりと村に来ることとなった。

（むしろ背に腹は代えられなかったらしい。元来ク族の沼はク族がカエル繁殖目的で作った沼であり、食料がたくさん手に入るわけではない。

その上沼なので湿気は過多。一度座れば泥だらけ。沼特有の魔物も生息している。生活するには不便極まりなかった。

だから生活環境を整えられている黒魔道士の村の方が彼らにとって数倍ありがたかったようだ）

ドワーフ達は崖に簡易の梯子を作り、そこを上ってコンデヤ・パタへ向かう。片道1日はかかるが森を越えるよりかは数倍ましだろう。そうして生活していくうちに、やはりぶつからざるを得なかった、そして実は288号が当初から懸念していた事態が起きた。

そう、村で口が増えただけ起きた、食糧不足。

霧や根のせいで環境悪化が未だに止まらずにいるのだ。

結界を解いたため、その影響は、村にも大きく響き始めた。

はじめ大量に用意されていた食料はあつという間に食い尽くされ、腐敗し、既にもって三日というところだ。

またもとも小さな集落だった黒魔道士の村の小さな建物一軒一軒に10人近く押し入れられている。

ストレスもたまる一方だ。

とうとうつれてこられたモーグリやドワーフ、人間達は小競り合いを始めてしまった。

「それとり過ぎじゃない？もう少し遠慮したどうなの？」

マダイン・サリで生活していたという女狩人が文句を言う。

「何を言うド！これくらいないと根っこの撤去も出来ンド！！お前さんこそただ飯食いの癖に偉そうだド！！」

「なんですってえ！？」

今も慌てて123号が止めに入り、なんとかその場は収まったが、またいつどこで始まるか判らない。

288号はため息をついた。

「クポ、なかなか上手くいかないクポね」

モーネルと一緒にため息をついた。

「…なんとかしないとね」

どうしようか、何か対策を打てないかと持てる知識をフル稼働させて考え始めた、丁度そのときだった。

「そろそろ太陽祭の時期だド」

「けど神輿も何もないド？」

「ご先祖様に謝らないととならないド…」

「そうだド…。せつかく毎年続けてきたというのに…」

ドワーフの若い夫婦が話しているのが耳に入ってきた。

どうやらドワーフ達の古来から続くしきたりの話らしい。

何か困っている様子を感じた288号は二人の会話に割って入る。

「太陽祭？」

「おお、これはこれはクロマの村長さんだド。ラリホー！」

「今日もお洒落だド。お前さんもこれくらい見習ったらどうだド？」

似たり寄ったりの服装をしている癖にそう夫に向けて後ろ指さす妻に、思わずモーネルは苦笑した。

違う意味で288号も苦笑しているのが見えた。

「いやいや、そんなんじゃないよ…。それより、太陽祭について教えてほしいんだ」

「ん、太陽祭だドか？毎年この時期になるとやる、神様とご先祖様に感謝するお祭だド。」

この時期は太陽が一番暖かで気持ちいいから、過ごしやすい季節にお礼するだド」

「お神輿で教祖様が祝詞を唱え、皆も一緒に唱えるお祭だド」

「あと、皆で踊ったり食べたり飲んだりするド」

「お前さんはそればかりが目当てだド!!」

たいそう仲の睦まじい二人に入れなくなったモーネルと288号は彼らにそつとお礼を告げて少し離れ、共に考えることにした。

「お祭クポ？」

「……」

「やるクポ？でも何もないクポ！」

「…けど、ドワーフ達の大事な仕来りを壊すわけには…」

出来れば、今までと出来る限りの変化なく暮らしてほしいと288号は思っていた。

それにドワーフ達は仕来りや宗教にとっても比重を置く種族である。

何もなかったかのようにスルーしてしまうのは、ドワーフ達にとって本当は耐え難いことなのではないだろうか。

だがしかし、完全に物資が不足しているのは周知のとおりだ。

神輿に、衣装に、舞台に、料理に、装飾品に、まだまだ準備しなくてはならないものがたくさんある。

この現状で、それが全て用意できるものとは限らない。

288号はなんとかして出来ないものかと頭を巡らせる。

「288号君、お祭するの？」

「オマツリとはなんだ？」

会話をしていた231号とジェノムの少年が声を掛けてきた。

「いいなあ、お祭り。楽しそうだね！」

「だからオマツリとは…」

「お祭りというのはね、皆ではしゃいで、目一杯楽しむことだよ」

「目一杯…」

「海の向こうでは魔物と仲良くするお祭したりするんだって。楽しそうだよね！」

ジェノムの少年は目を見開いた。

「魔物と仲良く出来るのか？」

「本当は少し違うんだ」

288号が柔らかに訂正した。

「狩猟民族だったらしくてね、殺生に詫び、食物を頂くことを神に感謝する祭なんだ。

今では魔物を狩って、競い合うみたいだけど」

「…？それで何故仲良くという単語が出てくる？」

「気にしないでよ、ぼくだってあやふやだったんだからさ」

「曖昧といえ、曖昧と。そちらの方が厳密かつ正確だ」

いけないいけない、随分話が逸れてしまった。

231号は慌てて話を戻す。

「ああそうさそうさ、お祭やるの？ぼくやりたいな！どんなお祭？」

「ドワーフのお祭だよ。詳しくは僕もあまり知らないからね、彼らに聞いてくれ」

「そうかあ、ね、333号君一緒に聞きにいこうよ」

そう言つて無邪気に231号は333号と呼ばれたジェノムの少年の手をとった。

「な、何故私が！？それに私はその名称を許容した覚えはない！！」

「288号君、待つててね！どんなことするのか聞いてくるから！」

333号を半ば引き摺るように231号は道具屋の扉を開けて消えていった。

中からわあわあ賑やかな声が漏れてくる。なんとも楽しそうさ。

「…これだけ期待されちゃったらやるしかないクポ」

「…そうだね。それにいいかもしれない。活気でこの淀んだ空気を吹き飛ばすことも不可能ではないかも」

「手伝うクポッ」

「ボクを忘れちゃ困るクポ〜〜!!」

籠をぶら下げながら、森の奥からチモモと、結界を解いた日以来この村で厄介になっているモーグリの一人、モチャが帰ってきた。たつぷりの綺麗な花や木の枝に木の実が籠に詰め込まれている。揺れる籠は今にも全てひっくり返してしまいそうだ。

「チモモ！モチャ！どこ行ってたクポ？」

「いろいろ取ってきたクポッ」

「これ、飾りに使えるクポ〜〜」

「こんなに頑張ってくれたんだ、僕も準備しないと…僕もドワーフ達に少し聞いてみることにするよ」

「頑張るクポ！」

「ボクらもお祭の準備するクポ！一杯飾り集めてくるクポ！」

「ラジャーだクポ!!」

少し光が見えてきたことに288号は足を弾ませながら駆けていく。これで物資不足が解決するとは到底思えない。むしろそれは悪化するかもしれない。

けれど用は気持ちの問題なのだ。皆が明るくなれば、いざこざも減り、前向きに行動してくれるようになる。

きっと。希望を持って288号は、チヨコボ舎の藁で遊んでいたドワーフの少年達に声を掛けた。

「お祭!？」

「何考えてやがる、これでどうやれってんだ!？」

「む、無理なくていいド。別に一年くらい休んだって許してくれるド!!」

「クポ〜〜」

「合理的ではない。却下するべきだ」

太陽祭の開催を公表した時、殆どの声が反対で埋まっていた。

288号は予測していたとおりだったので、いつもどおりの平静さで言った。

「やろつ。きつと楽しいよ」

それがきつと余りに似合わなかったのだろう。

少し間をあけてからフォッシル・ルー難民の男が口を開いた。

「きつ、気でも狂ったのか！？お前なら一番話が出来ると思ってたのによ！！」

「だからこそダクポ！！」

声を張り上げたのは、モーネルだった。

「このままじゃ皆喧嘩ばかりで共倒れクポ！もう一度仲良くするクポ！！」

「ぼくもやりたい！お祭やりたいっ！」

「今のままじゃどう頑張ったって目の前の問題を解決していくことは出来ないと思う。」

288号は高らかに、落ち着いた声で宣言する。

「だから、少しでも相互理解を深めたいんだ。丁度ドワーフにこの時期行っ祭があるそうだ。

それを一緒に、完璧には再現できないけれど、やりたいんだ。

皆で、一緒に準備をして、共に最後まで楽しもうよ！」

しん、と静まり返る広場。

288号はただ静かに皆の出す答えを待ち望んでいた。

「……まあ、そうだな。なんでも楽しんだもん勝ちだしな！おもしろえ、やろつじゃねえか」

一番反対していたかのように思えた男が最初に口を開いた。

フォッシル・ルーの難民達はもともと生活の保証を捨て宝探しで食いつ扶持を繋いでいた人々だ。

楽しいことが大好きなのだろう。

それを合図にするかのように序々に賛同する声が広がっていく。

最後までジェノム達は渋っていたが、周りの勢いに勝てるはずもなく、結局は同意するはめとなった。

彼らは閉鎖された環境で生活していたためか、押しに弱いのだ。

「大丈夫！皆でやれば成功するよ！！」

「楽しみクポ〜!!」

「でもきちんと食料は残しておかなきゃね」

「…何故こんなことを…」

「皆仲良くだド」

「準備はこの前とは違う、自由にやりたいようにやろう。ドワーフの皆、いろいろ頼むよ」

「ご指導よろしくだクポ!」

「もちろん、本当にありがとうだド!この恩は絶対忘れないド!!」

「それじゃっ黒魔道士村出張太陽祭、準備始まりだクポ〜!!」

おー、と明るい掛け声が綺麗に木霊した。

今度の共同作業は種族ごとに効率重視で分けられているわけではない。

皆自由に、楽しく、やりたいようにやるのだ。

時折遊びすぎてドワーフにしかられながら。時に自分で納得行くまで真剣に造りながら。

心地よい、とモーネルは思った。

あの陰鬱だった空気はどこへやら、288号の目論見どおり活気で全て吹き飛んだ。

皆一緒に、明るくわいわいと準備に取り掛かっている。

神輿を拵え、衣装を作り、お酒やご馳走を精一杯たんまり用意してそうして、二日が過ぎた。準備は綺麗に終えられ、お祭当日だ。

太陽が真上で輝く頃。

神輿は池に浮かび、人が一人乗っても平気なように造られている。

皆回りを取り囲むようにして立ちながらじっと教祖がそこで祝詞を唱えるのを聞いていた。

そうして合図と共に一緒に発音していく。なぞる様に、祈りを込めて。

万感の願いを込めて。

長い長い呪文が終わった。ぱたん、と教祖が本を閉じたら、いよい

よお祭の開始。

神輿を池の縁に止めて、ゆっくりと降りると衣装を身にまとったド
ーフやジェノム、モーグリの女性たちがくるくると踊りだす。

それを見ながら、酒をやる人、一緒に踊る人、歌いだす人、皆さま
ざまだ。

けれどそれは本当に本当に賑やかで、華やかで優しい祭。

皆共に笑いながら、互いを尊重し合い、分かり合った。

たくさんの種族として分かれていた存在が一つになった瞬間。
そのときだった。

ぶおおお、と音がだんだんと近づき、降りてくる音がした。

「飛空艇!？」

「な、なんでこんなところに!？」

「まさか助けに?!」

フォッシル・ルーの難民達は揃って期待と不安の声を上げた。

「に、人間が、くるの？」

「大丈夫だよ333号君。人間はそんなに怖くないって、皆が教え
てくれたじゃない」

「…きつと結界を解いたから場所が判ったんだ」

「そ、そんな」

「大丈夫よ。飛空艇を持ち自由に扱える人間なんてほんの一握り。
よっぽどの物好きじゃなければここへは来ないわ」

女狩人、ラニが強い口調で言った。

祭の最中なのに、と一同は警戒する。

「皆続けよう。森を越えてくるには時間がかかる」

「お、おー!!」

同様に隠せないまま、一同はまた祭に戻った。

それから、随分と時間が経った数時間後、祭もいよいよ佳境かと思
った頃にそれらはやってきた。

「ああやっとなつた。こんなところに有ったのか」

「はーあ、疲れたっス」

頭をベルトで止めた継ぎ接ぎ男と、バンダナを深くかぶった筋肉質な男が息を弾ませながら村に入ってきた。

「…貴方達は…？」

「あーいや、気にしないでくれたただの観光者だ…ってあれ？」

「……に、人間！？人間だああ！！」

フォッシル・ルーの難民達は思わぬ同族の出現に、慌てて飛び出してくる。

その後ろで少し警戒している黒魔道士達の姿が。

ベルト男は慌てて隣のバンダナ男に声を掛けた。

「お、おいマーカス、ここって…黒魔道士の村、だよな？」

「そ、そうっス、兄貴…。しかし一体どうして…」

「…フォッシル・ルーの難民達じゃよ」

「…道理で…急にこんなところ行くなんて言い出すかと思えば……」
「説明はきちんとしてほしいッス」

二人の男の後ろに、上空を突き刺すような髭を蓄えた精悍な顔つきの中年男性が現れた。

二人とは違って身なりがしゃんとし、高級そうなマントまで翻している。

それなりの身分なのだろう。

これがエーコの話していた「貴族」と言うもののなのだろうかとモネルは思う。

貴族は皆偉そうな顔をして、偉そうな服着て、偉そうにお喋りしてるのよ。

そんな楽しそうなエーコの弾む声を思い出す。

しかし、フォッシル・ルー難民達から動揺のざわめきが起きた。皆互いに顔を見合わせて、夢ではないかと確認している。

そう、それもそのはず。

なぜなら彼は

「…リンドブルム国王、シドゥファール…！」

リンドブルムはこの海の向こう、霧の大陸でも有数の文明を持つ大

国だとエーコから何度も聞いた。

初めて行ったときはその大きさにあんぐりと口をあけてしまい、ジタンに笑われて恥ずかしかったとか。

それから延々とジタンの鈍感さやらもどかしさにぶつぶつと愚痴をこぼしていたのを覚えている。

リンドブルムの土産話の中に、確かにシドの名前はあった気がする。お髭の面白いおじさんで、でもとってもお偉いさんなんだそーよ、と胸を張って教えてくれた。

それにすごい飛空艇を作っちゃうんだから！

「いやすまんのう、すぐにでも飛空艇を飛ばして助けにきてやりたかったんじゃが、乗員もわしも少し忙しかった上、結果が張ってあつて

正確な場所を把握できんかったのじゃ。けど結界をといたんじゃな。賑やかですぐわかつたわい。霧側にいたハンターたちは皆救出されておるぞ」

「帰れる……！帰れるぞ俺ら……！！」

「やったー！！やったなあ！！」

喜びを分かち合う難民達の歓声がこだました。

この苦しかった日々から開放されるのだ。

これほど幸せなことは無いだろう。

288号の判断は偶然の産物とはいえ間違いではなかったと、おいらは安堵した。

「コンデヤ・パタやマダイン・サリも見てきたぞ。大変だったな。至急リンドブルムがアレクサンドリアと共に援助するでしょう。」

「ほ、本当だドー？」

「で、でも向こうも大変だつて……」

「何、心配いらんよ。こちらよりはまだ霧の大陸の方が影響は浅い上、物資も豊富じゃからな。」

ただ…環境改善についてはもう少しだけ待ってくれ。もうすぐこの霧も晴れるから」

ぼつりと呟いたその言葉に、皆が一斉に反応する。

「霧が、晴れるだド!？」

「な、なんで!？」

「根本を今、正してくれている者たちがいるのじゃ。たった8人だけだな」

「…エーコだクポ……」

「ビビ君のことだね…」

シドは肯定の意味を込めて静かに笑顔を湛えた。

待つことしか出来ない、このもどかしさ。悔しさ。

同じ気持ちを共有しているのだろう。

心配して待ち続けるくらいなら、自分達も共にして力になりたい。

けれど。行っただとして何か助けられる自信は、ない。

結局お荷物になるのは目に見えている。

祈る他選択の余地は存在し無い。

そうして、この数日数往復でフォッシル・ルー難民達は皆元の霧の大陸へと戻り、コンデヤ・パタや黒魔道士の村には大量の救援物資が届けられた。

人員補強はもう少し待ってくれ、と言われた。今霧の大陸では根の影響と、戦争の影響で全ての国が崩壊しかけており、

あちらはあちらで復興作業が忙しいのだと。

でも十分だ。物資さえあれば人手はなんとかなる。

たくさん食料を盗んでしまったコンデヤ・パタの人たちにはこっそり贖罪の意味を込めて何かプレゼントしよう。

探してこなくちゃ。クポの実はとってもおいしいから、きっと喜んでくれるはず!

もうすぐこの霧は晴れる。

そうしてまた、未来はやってくるのだ。

Black man's villain story.
y - The sun is a limit of one.
- happy end

But, the story of this world continues.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9082h/>

太陽は一つ限り

2010年10月12日01時32分発行